



フロントランナー Front Runner

法政大学大学院教授

さかもと 坂本 光司さん(64歳)

「大切にしたい会社」を探して

よい会社とは何か。そのものさしを定めるべきだ。日本の会社の99%を占める中小企業をフィールドワークしてきた経営学者のメッセージが、脚光を浴びている。自ら訪ねた6千社超の情報をもとにした「日本でいちばん大切にしたい会社」(あさ出版)は、2008年の刊行以来、じわじわ反響が広がった。昨年12月刊行のシリーズ第3弾まで、累計の発行部数は60万部を超えた。

取り上げているのは、世界に誇る技術を持った町工場でも、大ヒット商品を生み出した会社でもない。安定した業績を上げながら、「徹底的に人を大切にする経営」を実践している会社ばかりだ。

障害者雇用率が7割を超えるチヨウク製造の日本理化学工業(神奈川)、使う側の視点に立ったものづくりに挑む義肢装具メーカーの中村プレス(鳥根)、創業以来、一度も社員のリストラをせず48年連続で増収増益を達成した伊那食品工業(長野)……。

10年には、「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞も創設した。人員整理しない、下請けにコストダウンを強制しない、法定の障害者雇用率を上回る、重大な労災がない、そして黒字経営。すべての条件を満たす会社から、優良な企業を表彰する。

根底には「正しい経営」をしている会社に光をあてたい」という思いがある。

「正しさ」の基準はシンプル。会社にかかわる「5人」を重視する経営だという。社員とその家族、外注先・下請け企業、顧客、地域社会、最後に株主。この優先順位こそ意味がある、と強調する。

賛美されがちな「顧客第一主義」も肯定しない。「顧客に商品やサービスを提供するのには社員。顧客のことを考えるより、社員の幸せを真っ先に考えるのが経営者の仕事」と言い切る。

「弱きを助ける」が身についた性分だ。1970年に大学を卒業後、郷里・静岡に帰り、県の産業支援機関に入った。地場企業を回る仕事を任せられると、同僚が1日2社訪ねるところ、夜遅くまで7、8社と訪問した。

「涙と汗にまみれた」中小企業の現場は、驚きの連続だった。大企業に一方的なコストダウンを迫られ苦しむ経営者、その下で爪の中まで真っ黒にして働く工員。理不尽な現実には怒りを覚え、何とか力になりたい、と奔走した。時には商談に付き添い、資金繰り表を作って銀行との交渉を手助けするなど、仕事の枠を超え、つきあった。

87年、中小企業の国際化に関する論文が懸賞論文の最優秀作に選ばれ、翌年、大学教授に転身。以来、「現場から学ぶ」をモットーに研究を続けてきた。著書が注目を集めて、講演に全国を飛び回る日々。それでも、分刻みの日程の合間を縫い、週2回の会社訪問を続ける。

「社員第一主義なんてきれいごと」という声には、こう反論する。

「社員を大切にしている会社はどこも好業績です。私が語っていることは、理想でも理論でもない。この目で見えてきた現実なのです」

文・立松真文
写真・川津陽一

b3面に続く

ご意見・ご感想は be@asahi.com